

國學院大學學術情報リポジトリ

オンライン時代の神道研究と教育：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 色, 音, コベル, スティーブン, キンレ, ペトラ, 小松, 和彦, ビュテル, ジャン＝ミシェル, ベンテリー, ジョン・R, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000505

セッション1

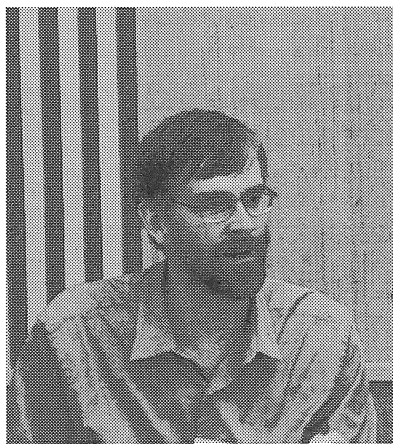
〈発題2〉

アメリカで宗教を教えるときの問題・教育方法

——インターネットの利用を中心に——

スティーブン・コベル

米国 西ミシガン大学准教授



【司会（ヘイヴンズ）】 第1セッションの第2部を始めたいと思います。今度の発表はスティーブン・コベル先生、中国大陸からアメリカ大陸に飛んで、アメリカで日本の宗教を教えるときの問題、教育方法、インターネットの利用を中心というタイトルでお話いただきます。

コベル先生はハワイ大学東洋学研究部で修士課程を修了した後、プリンストン大学の大学院宗教学研究科で博士号をとって、現在は西ミシガン大学で比較宗教、日本の宗教などを担当しています。このシンポジウムの後、10月に彼の本『ジャパニーズ・テンプル・ブッディズム』*Japanese Temple Buddhism*——直訳するなら「日本の寺院仏教」ですね——がハワイ大学出版局から出る予定です。

ではコベル先生、お願いします。

発題

スティーブン・コベル

【コベル】 こんにちは。まず井上先生をはじめ、シンポジウムを組織して下さったみなさま、このチャンスを与えてくださりまして、まことにありがとうございます。そして、今日コメンテーターをなさってくださるワルドさんにも感謝いたします。

ほんとうはこういう場合、論文を読み上げるのは好きではありませんが、日本語ですので、申しわけありませんが、念のためにつまらない形をとりまして、読むことにいたします。

この発表の目的は、日本宗教、特に神道はいかにアメリカで教えられているのか。そして日本宗教を教えるために、インターネットがどのくらい使われているか。またはどれくらい使うことができるかを紹介することです。

はじめに断っておきたいのですが、私は実際に教え始めたのが2003年の秋です。たった2年間しか経験がありませんので、カバーできないことはたくさんあると思います。自分勝手な願望ですが、これでディスカッションを引き出して、私が触れることができなかったことについて、活発に議論されれば、私も勉強になるでしょう。

私の発表のタイトルはとても広くて、アメリカをすべてカバーしているようですが、実際のところ、私が勤めている西ミシガン大学のような大きい州立大学で行われている教育に焦点を当ててみたいと思います。

まず教えることと説教することとは明確に区別があります。特に私立大学にとって、この線をはっきり引くのはとても重要なことです。ほかの分野、ことにいわゆるハードサイエンス、自然科学の教員の間では、宗教を教えることは説教することであるといった偏見がいまだに残っています。学生と父母も、ほとんどは宗教研究イコール神学だと信じてい

ます。私自身、今までこのことについて何回説明したのか、数えることができません。

なぜここで、このことを提起したかという、教えるときは常に教育と説教の区別に注意を払わなければいけないからです。学生の中ではクラスで仏教あるいは神道、道教などを実践することを期待している人が必ずいます。しかし、ほかの学生はこういうことが行われるのを警戒しています。この状況に対して、ある先生は自分のシラバスの中で、このように対処しています。ちょっと長い英語の文章をこれから読みます。すみません。

- The academic study of religion is a systematic exploration of the visions, values, and activities by which individuals and societies of past and present have understood and shaped their life-experiences. The goal of such courses is to promote a mature sensitivity to religious traditions, personalities, issues, and institutions, within their proper historical contexts. Such courses are not intended to persuade students either to-ward or away from any specific tradition, nor are they intended to serve as an element of any personal spiritual search in which students might already be engaged. Rather, the goal of such courses is for students to achieve an accurate understanding of certain cultures' religions on those cultures' own terms, and to evaluate those religions in a manner that is both properly critical and properly sympathetic. Should you want an experience that is "spiritually fulfilling" to you personally, please go to a religious center of your choice and practice there. You are in this course to study religion; if you wish to learn how to practice religion, you are in the wrong place.

3

つまり宗教学の授業の中では宗教を勉強するのであって、宗教を実践することはしない。もし、実践したい場合はぜひどこか教会でも、宗教の現場に行ってみてください。そういったことは授業ではやりません。これがシラバスの中に注意としてそのまま書かれています。これはインターネットの使用にも及んでいます。サイトの見解は、そのサイトの所有者の意見をあらわしていて、内容も読者を改宗することを目的にしているかもしれません。ということをあらかじめ、学生にはっきり教えなければなりません。前出の先生は以下のように、シラバスの中でインターネットについて対処しています。

- Remember to *think critically about what you are seeing*: many sites have an unexpressed agenda, just like movies and TV shows, and some may be well-intentioned but lacking in academic value. **SO BEWARE attempting to use the internet as an educational tool** — *particularly in regard to non-Western religions* — **without expert guidance**. Much of what you will find there is simply garbage. Remember that all a person has to do to create, for example, a website on “Taoism” is to set up the website: he or she does not have to really *know* anything about Taoism!
- So despite the immense amount of stuff that you can find on the internet, it is unreliable as an educational resource.
- Solid and reliable studies of non-Western religions generally appear only in your university LIBRARY, within the pages of scholarly books and journals.

4

長い文章でしたが、つまり、ネットにあるものはほとんどごみだと。このごみを使うのに注意してくださいという意見を持っているこの先生は、特に研究するためにはやっぱりネットのごみを使わずに、ピアレビュー peer review された図書館にある本、または雑誌に出ている論文を使ってくださいという注意をシラバスの中に書いています。

ところで、この先生のシラバスは7ページにも及びます。私に言わせれば長過ぎると思いますが、要はシラバス、講義、読み物、ディスカッションなどをつくるときは、扱っている宗教の全体像をあらわすものを掘り出さなければなりません。個別な宗教をアピールするようなことは禁物です。それと同時に、対象になっている宗教が冷たくて、息のないものになってしまうような教え方も避けなければいけません。

バックグラウンドとして、まずアメリカの大学のさまざまなタイプを紹介したいと思います。大学のタイプは教え方の可能性に大いに影響しています。大学を分類する方法はたくさんありますが、私たちの目的に合わせて、ここで3種類に分けることにしました。エリート学術総合大学、ハーバードやプリンストン大学のような私立大学が大部分ですが、中にカリフォルニア大学バークレー校や、ミシガン大学のような公立大学もあります。そしてリベラルアーツ大学と州立大学です。

エリート学術総合大学やリベラルアーツ大学で教える場合、一般にクラスサイズが小さく、学生は比較的によく勉強します。ゆえに授業の中で専門的な研究論文を取りあげたり、盛んにディスカッションを行ったりすることができます。一方、州立大学で教える場合はクラスのサイズが大きくて、学生もあまり予習してこない場合がほとんどです。

もうひとつのポイントは教育のレベルです。リベラルアーツ大学はほとんど大学院があ

りませんが、ほかの大学で教える場合、一般的に学部と大学院の授業の両方を教えなければなりません。大学院の教育につきましてはもっと専門化しているし、ほとんどは小さなセミナー形式ですので、ここでは主に学部教育に集中してお話いたします。

私が勤めている西ミシガン大学は大きな州立大学です。学生の人数は2万8,000人ぐらいです。私の所属している比較宗教学科は学内でも最も小さい学科のひとつですが、教えている範囲はかなり広がっています。たとえば学部生対象では世界宗教、または地域を中心とした科目を教えています。たとえばキリスト教、仏教、中国宗教、日本宗教など。私が教えているのは、日本宗教の科目、そして学部生と大学院生が混合したセミナー、たとえば世界宗教の教育方法、デス・アンド・ダイング (death and dying)、宗教と教育などです。

同等な大学と同じく、わが大学はすべての学部生に多種の一般教育科目の履修を要求しています。わが学科の世界宗教または地域を中心とした科目のすべては、一般教育科目の履修条件のひとつを満たす科目です。私の場合は日本宗教が「異文化と文明」という履修条件を満たしています。

一般教育科目を教えるとき、ふつうの科目を教えるのとは異なる課題があります。まずは学生の要求を満たすために、クラスサイズは大きくしなければなりません。私のクラスは通常 60 人の学生が履修可能です。先ほど、井上先生とお話ししましたら、井上先生の授業には 500 人もいると聞いて、私は 60 人でどんなに幸せかと感じていました。少人数のクラスを教える方法は、こういうサイズのクラスでは通用しません。

第2に一般教育科目を教えるということは、私のクラスをとっている学生の大部分——90%ぐらいかもしれません——は宗教研究や日本に興味を持っているからではなく、ただ一般教育の履修条件を満たすことだけが目的です。しかし、だからこそ価値があると私は思っています。日本宗教の授業を教えることは、学生に日本の宗教と文化を紹介することだと思います。それによって大部分の学生は初めて、自分と異なる世界観に出会います。そして、今まで慣れていた自分の世界観を見直すことになります。この授業は学生たちに宗教がいかに私たちの生活に影響しているのかを紹介する絶好のチャンスだと思っています。より有効に日本と宗教を紹介するために、私は授業でさまざまなテクニックを生かして、パワーポイントを使って授業をしたり、ドキュメンタリーや映画、アニメを見せたりしています。

私の神道の授業では宮崎駿監督のアニメ、「もののけ姫」をいつも見せています。このアニメはある意味では神道に対する理解をテーマにしています。宮崎監督のアニメのような映画は学生たちにとっても好評です。学生たちに日本文化、宗教、政治などのテーマへ興味を持たせます。これは単純なドキュメンタリーだけではできないことです。また、私は必ず学生に日本の小説または伝記作品を読ませます。これを通して、学生たちは少しでも自分の世界観を考え直し、自分の立場を再認識してくれればと期待しています。

授業の目的は、学生を仏教徒や神道の信者に改宗させることなく、学生たちに自分

と自分の文化が常に異文化とぶつかったり、変わりつつある歴史の中で存在しているという批判的な考え方を持ってもらうことです。

この目的をいかに果たしていくのか、実際のところ、私の授業は伝統的な講義式です。シラバスと講義をどうやってつくるかというと、これはインターネットが役に立つところ です。すでにご存じだと思いますが、インターネット上でいくつかの便利なシラバスサイ トがあります。さらに Google を使えば、参考になるシラバスがもっと掘り出せます。こ うして同じようなコースをほかの学者がいかに教えているのかわかりますし、自分のシラ バスを改善することができます。

宗教を教えるとき、一番参考になるサイトは「American Academy of Religion」(以下、 AAR) のホームページ¹かもしれません。このサイトには特別のシラバス・プロジェクト²が あります。そこに行くと、「Religions of Japan」に関して、3つのシラバスが見つかりま す。PDF ファイルやリンクをはるなど、いろいろなスタイルのシラバスがあります。シラ バスのほかに教育方法に関するサイトもいくつかあります。

たとえば「Wabash Center」のサイト³も紹介したいと思います。ひとつは resources というリンクページ⁴がありまして、そこで教育方法とか、teaching and the web とか、い ろいろなリンクがあつて、とても便利です。

同じく「Wabash Center」のリンクページ⁵に行くと、いろいろな便利なリンクが出てき ます。Religions のところに仏教のシラバスとか、キリスト教のシラバスとか、いろいろ ありますけど、これを見ると、残念ながら神道のものは載せていません。あとは Electronic Images and Texts とか Libraries とか、とても便利なものです。

ほかに教育方法で参考になるサイトは、まだいくつかありますが、私が好きなものが2 つあつて、ひとつはハワイ大学が出している Teaching Tips Index⁶という非常に便利なサ イトです。見れば、Critical Thinking から、Dealing with Stress とか、The First Day of Class とか、コースのデザインとか、Motivating Students とか、細かくいろいろ教育方 法を書いています。

もうひとつ私が好きなサイトはカリフォルニア大学バークレー校のサイト⁷で、本などを ダウンロードもできます。1983 年につくられたもので、中には少し古いものもありますが、 とても便利な教育方法のサイトです。インクルーディング・クラス・ディスカッションと か、学生が静かなときにはどうすればいいとか、これを勉強したほうがいいかもしれま

¹ URL: <http://www.aarweb.org/>

² <http://www.aarweb.org/syllabus/browse.asp>

³ <http://www.wabashcenter.wabash.edu/>

⁴ <http://www.wabashcenter.wabash.edu/resources/index.html>

⁵ <http://www.wabashcenter.wabash.edu/Internet/front.htm>

⁶ <http://honolulu.hawaii.edu/intranet/committees/FacDevCom/guidebk/teachtip/teachtip.htm>

⁷ <http://teaching.berkeley.edu/compendium/>

せん。

さて、先ほど「American Academy of Religion」のサイトで見つかったシラバスを読みながら、神道はどのように扱われているのかを検討してみましょう。もちろん、実際の講義を聞いてみないと、現実にはどんなことが教えられているのかはつきりは言えませんが。まず、1 番目のシラバス¹。このシラバスには神道についての講義があります。学期の途中と、後半の宗教と政治の話のとき、神道のお話が出てきます。

2 番目のシラバス²は、神道そのものについて何も表示していませんが、この周辺、「Earliest Themes in Japanese Religion」のところで触れているのでしょうか。

3 番目のシラバス³は学期のはじめに「Shinto and Japanese Tradition」と「Religion, Myth and the State in Ancient Japan」として、神道を紹介しています。また学期の終わりに神道は宗教と国家の話として、もう一度出てきます。

では、これはどういうことを意味しているのでしょうか。まず神道が学期のはじめに教えられるのは当然でしょう。言うまでもありませんが、神道は日本古来の土着宗教として知られています。それゆえに日本宗教の土台だと見られています。これは神道を勉強するのに便利な見方ですが、問題はこうして神道を見ると、神道は永遠に変わらないものだとされがちです。誤解を生まないように、私は必ず学生に、なぜシラバス上の順序で日本宗教を勉強するのかを説明します。

第2にこれらのシラバスの中で神道は必ず国家と結びついています。これもある程度事実ですが、政教関係のお話をするとき、神道だけを中心に話すべきではなく、仏教やキリスト教や儒教についても話さなければならないと思います。

それでは、私自身のシラバスを見てみましょう。これは恥ずかしいのですが、私のシラバスです。実は先ほどの人のシラバスは7 ページで、長過ぎると言いましたが、私の今学期のシラバスは8 ページにもなってしまいました。(アメリカで教えるとき、こういう notice のところも学校側に書かせられますが、いろいろと含めないとだめですね。)

今まで見たシラバスと似ていますが、ただひとつの違いは、私は神道のお話を仏教の後にしています。仏教のお話の前には神話のお話と神について話をしますが、神道についての話は仏教の後です。なぜこの順番にしたかといいますと、仏教の影響が強かったため、仏教に対する理解なしに神道を理解するのは難しいと思っているからです。

そして私も宗教と国家について話しますが、仏教、神道、新宗教、キリスト教など、諸宗教と国家の関係にすべて触れます。こうして宗教と国家の関係を歴史展開の中で話すと、「国家神道」だけという偏見を避けることができると思います。特にわが大学みたいなどころだと、ほとんどの学生は、日本または宗教学について何も知識を持っていません。授業で聞いたことをそのままのみにする場合がありますから、宗教の歴史を紹介するとき

¹ <http://www2.kenyon.edu/Depts/Religion/Fac/Adler/Reln275/Syl275.htm>

² <http://www.aarweb.org/syllabus/syllabi/b/bathgate/mb245w99.htm>

³ <http://www.aarweb.org/syllabus/syllabi/k/kirkland/1JO18-Kirkland-Japanese.pdf>

には十分な注意を払わないと危険です。

シラバスはたいてい、つくった人の強い面を反映しています。たとえば私の専門は仏教学ですから、私のシラバスは仏教の配分が一番大きくなっています。ほかの人のつくった日本宗教のシラバスを見ると、皆、それぞれ内容が異なります。これも学生に言うべきだと私は思います。インターネットからとったものだけではなく、先生の講義、先生がつくったシラバスについても批判的に見なければなりません。

ほかのものと同じように、私のシラバスも歴史的なタイムラインに沿っています。テーマ別で（たとえば巡礼や儀式など）教える方法もありますが、タイムラインの形式は学生に各宗教の発展をよりわかりやすく教えることができると、私は思います。もちろんタイムライン形式の中でも、テーマ別でカバーすることもできます。私の授業では歴史を教えながら、宗教と国家、巡礼、死生観、宗教組織などについてテーマ別で論じています。

神道を紹介することは宗教学を教えるうえで、とても重要な課題です。タイムライン形式で教えると、神道を例として、宗教はいかに発展してきたのかがよくわかります。たとえば日本の神話を教えるとき、私はその神話の政治的な役割も紹介します。そして、近・現代に入ると、神仏分離の歴史の紹介をします。そこで宗教と国家の話、現代化の話、西洋宗教学と日本の宗教界のかかわり、およびお互いの影響についての話などができます。

私の学生はこの授業を受ける前に、日本の宗教についてほとんど知識を持っていませんが、自分が仏教についていろいろわかっていると思っている学生は少なくありません。いろいろな偏見を持っているわけです。仏教と神道は日本の歴史の中で 1000 年以上、深い関係があったことは知りません。全く別のものだと思っています。歴史には無関係だと思っています。

神道を課題にすると、宗教の歴史的な内容とともに、比較宗教学のキーワード、たとえばシャーマニズム、祭り、清浄と穢れ、そしてジェンダーなどを話すこともできます。

さて、このシンポジウムのキーワードはインターネットですので、もうそろそろインターネットの話をしなければなりません。以上に話したような授業の中で、インターネットにどんな役割ができるのでしょうか。正直なところ、私は授業の中で直接インターネットを使うことはほとんどありません。便利というより、ちょっと言葉が強いかもしれませんが、邪魔だと思っていますから。授業でそのまま使えるサイトは非常に少ない。といっても、最近、私は神社やお寺のホームページを授業の中で見せています。たとえば靖国神社を紹介するときは、靖国のホームページをお見せします。

もうひとつの便利なサイトは、カリフォルニア大学バークレー校のサイトです。そのサイトではたくさんの写真とテキストとか載せています。私はよくネットで、授業に使えそうな写真を探します。しかし、ただ写真だけのためにネットを利用するのはもったいないと思います。ディスカッションのときにどなたか、よりよい使い方をご存じであれば、ぜひ教えてください。

今まで、あまりネットを授業で使わなかった理由は、やはり適当なサイトがまだ見つ

っていないからです。神道に関する授業に持ち込めるようなサイトはありません。そういうサイトをつくるのが難しいとはわかりますが、どなたか教育のためのサイトを立ち上げてくだされば、とても助かると思います。特に必要なのは短い映像、たとえば儀式の映像、結婚式の映像などです。私の学生のような、外国へ行ったことがない人には（外国だけじゃなくて、だいたい私の学生はほかの州すら行ったことがない場合が多いのですが）、そういう人にはやっぱり映像や音声などはたいへん影響力があります。

学生は実際に映像を見たり、音声を聞いたりすると興味がわきます。たとえば私は自分で撮った写真やビデオ、そしてアニメや映画などを学生に見せています。学生からの評判は上々です。残念ながら最初に見たとき、「あ、これはいいぞ」と思った神道関係サイトは結局、ほとんどだめでした。たとえば、神社本庁のサイトには——ちょっと怒られるかもしれないかもしれませんが——とてもがっかりさせられました。

授業に直接持ち込めるようなサイトはまだありませんが、インターネットは日本宗教を教えるのに有用な道具だと思います。私の授業では学生はいくつかの小論文を書かなければなりません。そのためにネットを利用して資料を集めなければなりません。ですから、私はネットを使うときの注意点を学生に教えます。学生はネットで探し出した情報をそのまま信じてしまうからです。たとえば、私がプリンストン大学でティーチング・アシスタントとして勤めていたとき、ある学生が神道について論文を書きました。彼はネットを使って研究しましたが、神道の歴史と日本の歴史についての情報はほとんど全部、靖国神社のホームページからとりました。彼は、そういう情報が偏っているかもしれないとは考えもしませんでした。

このようなことを防ぐために、私はまずネット上の情報源を使うときの注意点を授業で提起します。そして、ウェブページの評論を宿題にしています。つまり、書評のように日本宗教に関連するサイトをひとつ選ばせて、そのサイトの内容の紹介と批評を書いてもらいます。

ウェブページの評論や学生の小論文のための情報源として、インターネットを利用するほかに、インターネットの一番便利なところは、e-テキストが使えることかもしれません。仏教に関するテキストが多いのですが、神道関係も少なくありません。e-テキストを使うと、学生は本を購入するお金を節約できます。州立大学の学生はほとんど皆、学費を稼ぐために仕事をしながら通学しています。一般の教科書は高いため、ネットから無料でダウンロードができると助かります。

e-テキストサイトの中で一番いいのが、たぶん、University of California, Berkeley校のJapanese Historical Text Initiative¹です。このサイトはテキストのほかに映像もあり、とても便利なサイトです。『古事記』のテキストや神道用語の辞典がありますし、Electronic Publications のページには映像が入っているものもあります。Linked Electronic Publicationsの中には国学院が出している、*Matsuri*とか*New Religions*とか、

¹ <http://sunsite.berkeley.edu/JHTI/>

そういうのも載せています。

そのほかにこの Internet Sacred Text Archive¹ というサイトもとても便利です。そのサイトはだいたい、著作権が効かなくなったテキストばかりですので、ちょっと古過ぎる翻訳もありますが、便利と言えば便利です。古過ぎるもの…、このバシル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) の『古事記』訳とか、ちょっと古いんですけども、日本語もあるし、もっと下に行くとラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) が書いたもの、岡倉天心のもの、みんな載せている。

あとは、最近出た Google の Print Google.com² も便利ですが、ここはダウンロードできるテキストと一緒に、いろいろ要らないものもいっぱい出てきます。それはちょっと不便なところだけれど、ここに行くと、たとえば神道をサーチすると、2 万 1,600 ページが出ます。だいたい本の紹介だけですが、この本はほとんど 1 章ぐらいは PDF ファイルとして載せています。

神道関係ですと、井上先生が編集された本、*Matsuri* も国学院のウェブページからダウンロードできます。しかもオンラインのほうは用語解説もついています。これも学生にとってはとても便利です。私の学生はなかなか単語の意味を聞いてくれません。知らないまま読んでしまうから、こういう用語解説があると、とても便利です。この本と井上先生が編集されたほかの本は、さっき見せたカリフォルニア大学バークレー校のサイトからダウンロードもできます。

そして、シャッツナイダー (Ellen Schattschneider) 先生の本、*Immortal Wishes: Labor and Transcendence on a Japanese Sacred Mountain* のためのサイト³、本のためのサイトですけれども、そこに先生が撮られた映像や写真も載せています。e-テキストのほかにも、神道と日本宗教に関する雑誌や、新聞記事もネットからダウンロードできます。これはさっきのシャッツナイダー先生の本を宣伝するためのページだけれど、いろいろ先生が撮ったビデオも載せています。雑誌だと、たとえば私は靖国神社参拝問題やオウム真理教などについて、いろいろなサイトからとった新聞記事を学生に読ませています。これは PDF として、自分の授業のホームページに載せて、学生がそれで読めます。

ここまで清聴してくださった皆さんはすでにわかったと思いますが、私はまだインターネットを完璧に利用していません。しかし、まだ希望があります。井上先生と先生のグループが映像や翻訳されたテキスト、学術論文など、盛りだくさんの教育用サイトを開発してくれることを期待しております。

ご清聴をありがとうございました。これからディスカッションをワルドさんにお任せいたします。皆さんのご意見を楽しみにしています。

¹ <http://www.sacred-texts.com/shi/index.htm>

² <http://www.print.google.com>

³ <http://people.brandeis.edu/%7Eeschatt/ImmortalWishes/index.html>

コメントと質疑応答

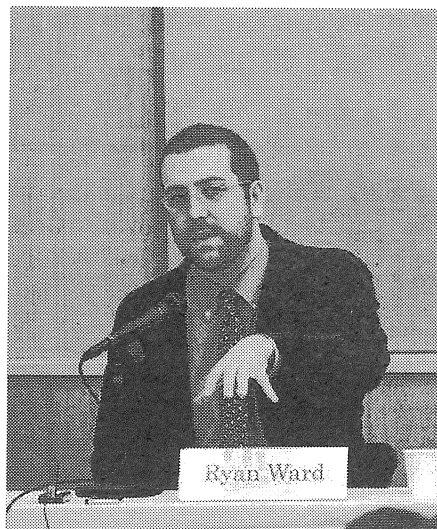
【司会（ヘイヴンズ）】 ありがとうございました。コベル先生が特にアメリカで教育ツールとして、どのようにインターネットが使われるか、最初のシラバスづくりなど、その後、神道、日本宗教のサイトも紹介しました。

これからコメントに入ります。コメンテーターは、ライアン・ワルドさん、日本文化研究所の調査員で、東京大学の博士課程に所属しています。

【ライアン・ワルド】 私は、ことしの7月にプリンストン大学を訪問しました。そのとき、大学院生の授業をのぞいてみたのです。その大学院生が何をやっているかというところ、『沙石集』というものを日本語のままで注釈をつけていくわけです。日本と全く同じ、たとえば東大のインド哲学科でやるような作業とそっくりなのですね。そこでコベル先生が教育を受けて、そして今度は『沙石集』を読めるか読めないか、そういうところじゃなくて、そもそも日本を認識しているかどうか、日本といえば何かブルース・リーだみたいな、そう思っている学生がいると思うのです。

そういうところで、つまり神道という講座とか、そうじゃなくて日本の宗教学という授業の中の一部として神道を取り上げるということですが、そこでまず、いかに取り上げるかという問題になると思うのですけれども、その歴史的な流れでいくと、古代の神道、中世の神仏習合、近世の国学、神仏分離あるいは国家神道、教派神道などなど、そういうやり方で教えると思うのです。そこでやっぱり学生にとっては、これは全部神道なのかという、その一貫性はどこにあるのかという疑問が出てくると思うのです。

あとで少し触れると思いますが、たとえばインターネットを使うと、わかるようになるか、それとももっとわからなくなるのかということになると、たぶん、もっとわからなくなると思うのです。



ただ、そこでもうひとつ、これは皆さんご存じだと思いますが、今の学生は先生の話長く聞く能力というか、努力がちょっとないですね。でも一方、視覚的なものを求める傾向が強いのです。そうすると画像、インターネット、そういったものを使わなければならないのです。そこでひとつ、非常にいいなと思うのは、以前だと、さっき先生から紹介していただいた『日本書紀』とか、『武士道』とか、そういう非常に古典的な古い本がたくさんあって、昔なら学生はこれの英訳を読んでいくわけですね。

そうすると、非常にオリエンタリズム的な、ちょっとそういう偏りがあったと思うのです。日本に来たら、何だ、武士道はどこにもないんだということが分かって、みんなものすごく混乱すると思うのですが、画像とかインターネットによって、生きた宗教を教えることができるようになりつつあるということです。

ただ、学者がやっている内向的な、非常に専門的なサイト、あるいは学術的な論文がある一方で、それ以外となると、教団自身が宣伝のためにやっているサイトということになる。どうしてもその間がなかなかないのです。

だから素人、あるいは何も知らない学生のためのサイトはまだということですが、それはおそらく、日本の宗教を教えている欧米人は今までは教育方法というか、教え方についてあまり考えてこなかったからだと思うのです。たぶん、大学院で『沙石集』を読んでいて、博士論文を出して、そこまでですよ。だから、これからたとえば『神道事典』のような学術的な内容の非常にすぐれたものと、今度、教団が出しているものの間に、またさらに学生のためにいろいろと考えないといけないと思うのです。

ただ、そうすると、それはたとえば日本人が一方向的に何かを発信するだけじゃなくて、向こうのニーズは何であるのか、向こうの先生はどう困っているのか、そういったことを考えないといけないと思います。

ちょっと最初のほうに戻りますが、やっぱりどこかで、まだそもそも神道とは何かというものとぶつかると思うのです。それがわからなければ、そもそもどうやって神道を教えることができるのかという問題もあると思うのです。私にはその答えはありませんが、とりあえずそういうことです。以上です。

少し、たとえば教科書など、そういったものはどういうものがあるのでしょうか。私の記憶では、そういった教材はインターネットにはあまりないですよ。

【コベル】 いくつかの質問を出してござって、ありがとうございます。まず、長い授業は学生が聞いてくれないという問題。実は私の授業は週2回で、レクチャーが1時間半ずつ、学生はけっこう苦勞していると思います。そのためにはできるだけ写真や、短いビデオとかを見せたりするのですが、先ほども言いましたが、やはりもっとあればいいと思います。どこか、特にネットのサイトとかでそういうものがあれば、とても役に立つと思います。そのまま授業に使える、5分間ぐらいのいろいろな儀式の映像とか、人へのインタビューとか、そういう小さなものがあればいい。今のドキュメンタリーは授業にほとんど使えません。

たとえば禅について、とてもいいものがありますが2時間もあって使えない。ほかのものもだいたい1時間くらいで、長すぎる。自分のレクチャーの中に持ち込みたいから、短いビデオがあれば一番いい。そして生のビデオがいい。コメンタリーはなしで。そういうものがどこか、たとえばネットからとれば、とても役に立つと思う。それをやれば、授業がそんなにつまらなくなくなるかもしれません。私の学生はだいたい半分ぐらいが寝ているかもしれませんけれども、ああいうビデオがあれば役に立ちます。

あとは武士道の話とかがありましたけど、どうやって生きた宗教を教えるか、それも問題です。ステレオタイプが多いですね。武士道とか、そういうのが。私は実は授業の中で最初は武士道に関して何も教えなかった。触れると、学生がすぐ、ああ、やっぱり日本は武士道ですね、皆、うちに帰って剣を出して「ホイヤーッ」とかやると思い込むから。ただ、やっぱり武士道にもちょっと触れないとだめだと思って、最近は武士道も授業の中で触れるんだけど、その歴史的な流れとか、批判的ないろいろな角度から見て教えると、学生が「なるほど、思ったのと違う」と思ってくれることもあるけれども、わからない学生もいっぱいいると思います。

禅や武士道や「神道は必ず環境と結びついている」とか、そういうようなステレオタイプをできるだけ授業の中で話します。ステレオタイプを破るため、なくすために。

あとは確かに学術サイト、宗教のサイトとの間の教育用のサイトがあれば、一番いいなあと思う。今、ほとんどは学者がつくっている学術サイトで、それは授業には使えないのです。特に学部生は英語で書いていてもわからない。学者は長い単語、普通に使わない単語とか使っているし、そしてつまらない書き方で書くから、学部生にはそれはだめですね。だからもっと一般向きで、簡単な紹介があればいいと思います。宗教の団体が出しているサイトも便利だけど、それはいちおう一次資料として使えばいいが、学生に注意させなければならない。

なぜ、今までは学者は学術サイトばかりやっているかという、日本の場合はわからないけれども、多分アメリカの場合は、それはテニユア *tenure* [長期在籍権] の制度に直接関係があると思います。アメリカの場合はほとんどの大学はテニユアをもらうのに、一番大切なのが研究の業績。教育方法に関する本を書いたりしても、ほとんどテニユアには関係ありません。たとえば教科書を書いたりするのはテニユアにあまり関係ないと、私の先輩が皆、言いました。教科書とか、翻訳物とか、それはテニユアをもらってからしてください。そうしないと、テニユアがもらえません。おかげさまで、私は今度本を出すので、テニユアは大丈夫でしょう。これから実は教科書も書こうと思っていますが、そういう問題が大きいだろうと思います。教科書とかはすでにテニユアをもらっている人がやらないとだめなのです。ただ、そういう人たちはやっぱり自分の研究に夢中な人が多いから、教科書を書きません。

そしておっしゃったように、皆は今まではあまり学部生のための教育を考えませんでした。特にエリート大学から出た人たち、私自身も含めて、プリンストン大学ではそういう

訓練を全然受けていません。大学院を出たからといって、授業が教えられるということは、ありませんね。教育方法の訓練がないと、いい先生になれないと思います。学部生に教育できないと思います。でも、それもテニユアの問題と関係があると、私は思います。そのシステムがちょっと変わらなないと、近い将来にアメリカでそういうサイトができるということはないと思います。

【司会（ヘイヴンズ）】 ありがとうございました。

では、これから 12、3 分ぐらい、時間が残っていますので、一般のフロアから、どうしてもアメリカの教育法とか、アメリカの教育における神道あるいは日本の宗教について質問したい方がいらっしゃいましたら、手を挙げてください。どうぞ、どなたか。

【井上順孝】 アメリカの大学で、神道を教えるという方は非常に少ないので、たぶんインターネットを利用するときも苦勞をされると思うのですが、日本の場合は、私の感じでは、宗教関係のサイトというのは、ここ 2、3 年で非常に充実してきたという感じがします。90 年代は使えるサイトというのはほんとうに少なく、あまり私も利用することはなかったのですが、ここ 1、2 年で相当変わったと思っています。それは学術面でもそうですし、それからプライマリー・リソースといいますか、教団やそういうところがつくっている情報もさかんですし、それから神社も、今、靖国を言われましてけれども、ほかにもいっぱいサイトが出てきていまして、動画があるのもありますし、研究・教育に使えるものが増えたと思います。ただ、それをアメリカで利用するとなれば、それは日本語が読めないと思うので、大変だなと思います。

ただ、私はそれだけ豊富になりながら、教育の面で考えるときには、ちょっと発想を今、変えつつあるのですが、インターネットを使つての情報については、教師は教える側ではないと。教わる側であると思っています。というのは、おもしろいサイトとかいろいろな情報を学生のほうが知っているのです。

教師の役割は何かというと、そうやって見つけてきたサイトが果たしてどういう種類のものであるかということを教えてあげる。それは信頼できるものであるとか、それは非常にかたよったものであるとか。そういうふうに私は最近、発想を変えております。

自分でも一生懸命探るのですが、ひとりで探せる量は限りがあります。学生はしかし、それぞれの関心に合わせて、多様なサイトを見つけてきて、多様な情報を持っています。多くの先生は今、そういうことを知らないのです、日本の大学の先生も。ネットを使わない先生は学生がどんな情報を得ているかということすら知らない。知らないで偉そうにしゃべっているというのが、私は今の大学教育の現状だと思っています。

ですので、今、コベルさんは役に立ついろいろなサイトがあればとおっしゃったんですが、それは永久にできないと。教育する側がそれをつくろうとしても、現実のほうはどんどん先に行くと。だから探してくるのは学生に任せたほうがいいと。そして、それをコントロール…、というのは交通整理ですね。それがこれから、もしインターネットを授業の中で使うとしたら、それだけとは言いませんけれども、それはひとつの大きな方法

になるんじゃないか、主流になるんじゃないかというのが私の感じなのです。そのへん、いかがでしょうか。

【コベル】 私も賛成です。そのために私は学生にウェブページの評論文を書かせる。それは学生が自分でネットに行って、サイトを見つけて、それで、そのサイトはだれが書いたとか、どんなものを載せているか、普通の書評と同じようなものを書く。それで私は学生のおかげで、いろいろサイトの勉強をして、私のリンクのリストがどんどん長くなっている。学生が書いたものも集まって、いつか自分のウェブページのリンクで、学生のコメントリーも載せたいと思います。

でもやっぱりそれはアサインメントを通してというか、宿題として使っているけど、レクチャーをよりおもしろくできるために、資料のサイトも、特に映像のサイトがあればいいなあと、期待しています。授業の中で学生を小さいグループに分けて、皆それぞれサイトを探したり、話したりすることもできるのですが、両方ができたら一番いいです。

【司会（ヘイヴンズ）】 ありがとうございます。ほかには。

【ケイト・ナカイ】 上智大学のケイト・ナカイです。いろいろ教えていただきましてありがとうございます。

やはりテキストを載せるサイト、けっきょく、Japanese Historical Text Initiative にしても、ここで見ますと、だいたい古いものが多いですね。著作権の問題がないもので。それで何か逆戻りのような印象があります。やはりたとえばチェンバレン訳の『古事記』の後に、フィリップパイ (Donald L. Philippi) 訳の『古事記』が 60 年代に出版されており、それでも古いのですが、とにかくそれはチェンバレンの『古事記』よりだいぶ進歩しています。ですけど、けっきょく、学生がインターネットで探すとき、やはりチャンバレンのほうが出てきて、フィリップパイの存在を学生が知らないし、そしてほかのテキストもすごく古いものを中心になっていますので、出版上の事情から、新しいものが載せられないことはよくわかりますけど、学生にもっと文献を探す方法をどういうふうに教えればいいのかという問題をすごく痛切に感じました。

【コベル】 そうですね。学生がウェブを使うときのひとつの注意点は、翻訳されたものがあっても、チェンバレンのようなものはだいぶ古くて、ハーンのものももっと古いとか、そういうのを注意したほうがいいと。カリフォルニア大学バークレー校のサイトがもっとより新しいものを載せているけれども、私の勝手な希望だが、新しいものがウェブに載せられれば、特に一番最新のものがあれば、私の学生も最新の翻訳を読める。大切なのは、とてもベーシックなことだけでも、お金の節約。これが私の学生にとってはとても大切。教科書とか合わせて、だいたい 100 ドルぐらいかかるのだけれども、学生の budget [予算] ではそれが限度です。だからネットから無料でダウンロードできると、とても役に立ちます。勉強のためだけでなく、貯金のためにも。

【司会（ヘイヴンズ）】 どうも。もうひとつぐらいいかがですか。もしなければ、私からちょっと気がついたところですが、私も痛感している問題は、大学院で教育法を習わな

いということをコベル先生が最後のほうでおっしゃったのですね。それから、それとは対照的に、たとえば一番最初に紹介したシラバスのサイトがあるのですね。それはひとつの認識が変わっているのを象徴しているといえますか、これからをもっと教育法を紹介する、あるいは教育法のエイドを載せるサイト、あるいは先生たちが集まるチャットルームとか、お互いに意見を交わす、方法を交わすチャットルームとか、何かそういうサイトについてはいかがですか。

【コベル】 チャットルームはあるかどうか、私は知らないんですけど、やっぱりAARでシラバス・プロジェクトが始まったのがたぶんその意味でしょう。それによって、ほかの人のシラバスを勉強して、自分のシラバスをより改善できる。どういうふうによりよく教えられるか、勉強できるけど、やっぱりそれだけじゃなくて、教育方法は大学院で必ず教えたほうが良いと思う。実は私の学部の大学院は修士課程までだけど、教育方法の授業もある。

【司会（ヘイヴンズ）】 それはハワイ？

【コベル】 今の西ミシガン大学で。そういう授業は必ず修士課程の学生に教える。なぜかという、学生はその授業をとってから、次の学期からティーチング・アシスタント、または lecturer（講師）になるから、少しくらい教育方法を教えないとだめだと、先生たちは皆わかって、それを教えはじめた。やっぱりもっとそういうチャンスがあればいい。AARでもそういうグループがあれば…。あるかもしれませんが、あればいいと思う。

【司会（ヘイヴンズ）】 最後になりますが、何かご質問はありますか。井上先生、どうぞ。

【井上】 もうひとつ質問したかったのは、今日のご発表はアメリカで神道についてということでした。それに対して私は日本で神道を教える例で言ってしまったので、アメリカでキリスト教を教えるときに、インターネットを使ってそれを教材にしようとするとき起こる問題というのもあると思うのですね。

それでお聞きしたいのは神道という、つまり日本という外国の、しかもあまりアメリカで知られていない宗教を、ネットを通じてやるときの問題と、アメリカではたとえばプロテスタントについてやろうとしたら、たぶんものすごいサイトがあると思うので、それでも、たとえば今、インターネットを使って、それを教材にしようすると、こういう問題があるという、そういう2つあると思うのです。今日のお話の中で聞きたいのは、要はインターネットを使っての授業での問題点という部分と、それから神道だから起こる部分。だいたいわかったのですけれども、改めてちょっとそれを整理していただくと、今度は逆に、我々もこれから外国人に対してのいろいろなサイトをつくらうというときにも参考になりますので、その辺を教えていただけるとありがたいのですが。

【コベル】 神道だから難しいところという質問ですか。

【井上】 そういうところと、今、一般に宗教をインターネットを使って教える、その

ときに起こる難しさ。

【コベル】 やっぱりおっしゃったとおり、たとえばキリスト教を教えると、また違う問題がいっぱい出ます。特に西ミシガンはキリスト教が強いところで、学生がみんな信者ですので、わかっていると思って、キリスト教の授業に出ると、先生の言うことに反発したりすることもありある。そしてネットから使っているものも注意して選ばないと、なぜこのサイトを使ったか、なぜ私たちのサイトを使わなかったかとか、そういう問題も出るみたい。私はキリスト教入門の授業を担当していないのですが、いろいろな話を聞いています。ぜんぜん違う問題がいろいろ出る。

これは3、4年ぐらい前に起こったことですが、日本語でどう言うかちょっとわからないけれども、*speaking in tongues* [異言]、学生がひとり、授業中に倒れて、異言で「パッパッパッパッ」、*speaking in tongues* が始まった。それは私の授業にまだないんですね。そういう違う問題にぶつかっている。

たぶん、ほかの宗教を教えると、まずステレオタイプをやぶるのが一番大切かもしれません。神道を全然知らないからほとんどの学生は神道に関するステレオタイプをあまり持っていないかも知れませんが、仏教に関するステレオタイプをたくさん持っている。それはやっぱり注意しながら教えなければならない。

神道の場合は、知っている学生は少しステレオタイプを持っているけど、神道というより日本文化のステレオタイプを持っている子が多い。特に10年、20年前ぐらい、私の時代だと、だいたいみんな、日本研究に入ったのが——みんなじゃないんだけど——武術に興味があったから。今は私の学生が武術じゃなくてアニメ。武術に興味を持っている子もいるけれども、アニメが強い。アニメから習ったステレオタイプも止めなければならない。

だから、たとえば「もののけ姫」を見せた後、必ず1時間ぐらいのディスカッションをやる。学生は授業を聞いてから映画を見て、映画を見てからディスカッションをする。ディスカッションが終わると、だいたい、「ああ、なるほど、そういう意味もあるのか」とか、ステレオタイプが少し抜けるのだけど、それが一番難しいところです。神道だから難しいというより、他文化だから難しいというか、ステレオタイプが多いから難しい。

【司会（ヘイヴンズ）】 ありがとうございます。

では時間になりましたので、発題2を終了させていただきます。（拍手）